

それは試行錯誤の末の詩行錯乱か、獅子身中に  
 しみわたるしけた屍に過ぎないものなのか。20  
 世紀の頂点にそびえる文学者ウラジーミル・ナボ  
 コフが“*гений поэзии и проза прагматичной прозы*”（沼  
 野充義訳で「詩の身体と透き通った散文の精」『賜物』、  
 河出書房）と頭韻を踏みながら示唆するように、  
 韻文と散文の二項対立が時に転覆し時に並存しう  
 る文学の特徴について研究することが現在の私の  
 関心になっている。このようなテーマが一見無縁  
 な『東洋学術研究』にどう役立つかができるの  
 か、悩まない日はない。二項対立といえればロマ  
 ン・ヤコブソンが提起した無標・有標、日常的言  
 語と詩的言語、散文と韻文、換喩と隠喩など、ロ  
 シア・フォルマリズム以来の伝統に遡る。コンテ  
 クストとテクスト、あるいは、文学作品は思想伝  
 達の手段なのか、モダニズム的に文学作品の自己  
 価値性を認めるべきなのか。この観点はテクスト  
 構成に不可欠な「読者」の存立に関わってくる問  
 題であると考えられる。

ウラジーミル・ナボコフはロシアで西欧的議會

### 文学作品を読むこと——二項対立の超克を試みて 寒河江光徳

制民主主義の導入を志したカデット（立憲民主党）  
 の生みの親の一人である政治家ドミトリー・ナボ  
 コフの息子としてサンクト・ペテルブルクに生ま  
 れ（1899年）、ロシア革命が起きた年（1917  
 年）にクリミアに移住した。そこからケンブリッ  
 ジ大留学のための渡英を経て、ベルリン、パリ、  
 米国、スイスへと移り住みながら、一生をロシア  
 語と英語の文学作品の執筆に費やした。ナボコフ  
 が書く貴族的文体には思想伝達的な要素はなく、  
 形而上性は形象や美学と一体となって表明される  
 のが特徴である。『ロリータ』に代表される作品  
 の表面をなぞって思想的教訓の欠片もないと非難  
 することは誰にでもできる。しかし、私はそうと  
 は思わない。日常的言語と詩的言語が脱構築され  
 うるならば、高尚な教訓に無味乾燥で陳腐なト  
 トロジーを、それとは逆に、言葉遊びのような芸  
 術至上主義的な文体に高尚な思想を見出すことが  
 できるはずだ。そして、このアプローチが東洋哲  
 学の解明にも役立つときがくると信じている。

（さがえ みつり／東洋哲学研究所委嘱研究員）